

との無条件の信頼関係を築くことができず、その結果、子どもの「心の育ち」にも悪影響を及ぼすケースがあります。

子どもの成長にとって、これは極めて重要な問題ですので、「新制度」に関する多くの方の「一抹の不安」は、この一点に集中しているように思います。

かつて、毎年佐久の地を訪れ、講演や演習、事例研究などを通して、長野県の教職員に臨床心理学及び箱庭療法、カウンセリングの手ほどきをされた京都大学大学院教育学研究科教授、岡田康伸先生が、この問題を「アクティブ・アウト」(起こるべき関係において起こるべきことが起こらず、他との関係において起こること、もしくは、他との関係においても起こらないこと、また、そのために生ずる成長上の問題)と指摘しています。

さらに、「アクティブ・アウト」の事例には枚挙にいとまがなく、先生は、「アクティブ・アウト」は今日の学校教育現場で起こっている様々な現象の根幹にある深刻な問題とも指摘しています。

おおよそ、育児及び保育、教育においては、必ずデメリットがあり、不幸にして起こり得るデメリットに対する注意や配慮が不可欠です。ところが、「新制度」の説明書を読む限り、メリットについては述べていますが、デメリットについて

はほとんど触れていません。

この言及されていないデメリットこそ、「アクティブ・アウト」です。



親と保育士は、乳幼児期における子育ての大切なパートナーです。したがって、子どもの成長にかかわり、その大変な営みを通して、親(保育士)としての自分も成長する、という共通する目的と役割があります。しかし、親と保育士の役割には決定的に異なる点があります。

衣食住や安全、承認、愛情など、我が子の「人間としての基本的な欲求」の充足に責任を持ち、我が子に無条件の愛情を抱いて、我が子に、「かけがえのない、無二の存在」として接する親と、親からの委託を受けて、集団と時間という制約の中で、親の代わりに保育をすること、すわなち、園児の健康と安全に配慮し、心身共に健やかで、調和のとれた園児を

育てることを任務とする保育士とは、担っている役割が根本的に違います。

夕刻、親の迎えを待ちわびる園児の寂しさを心から癒せるのは、親だけではな いでしょうか。保育士の方には失礼ですが、保育士には、それをまぎらすことはできても、親と同じように癒すことほ できないと思います。それは、保育士がいかに研修を重ね、いかに献身的に頑張っ ても不可能でしょう。

児童の福祉・厚生事業にかかわっている方から、次のような話を聞いたことが あります。

「(ある母親から伺った話ですが)その母親は、上の子2人は1歳から、保育園に預けていました。仕事に追われていたのです。末の子は、時間的な余裕がありましたので、年少から入園しました。すると、上の子を育てた経験があるはずなのに、末っ子の入園前の育児のほとんどが初めてのように感じ、戸惑ったそうです。下の子の育児を通して、上の子のときは、保育園に頼りつきりで、母親としての自分の役割の多くを、保育士の方に担っていただいていたことに、あらためて気づいたそうです。」

同じような体験を語る母親は少なくないようですが、親の役割を保育士に依存

していることを自覚している親御さんは、仕事や生活に追われる繁忙な日々でも、親である自分と我が子の間で起こるべきことを大切にされているそうです。

しかしながら、「アクティブ・アウト」の自覚が乏しい親御さんは、子どもが一日10時間以上、保育園で過ごすことを当然と考えており、子どもの気持ちを慮ることも少なく、勢い、家庭の生活も親のペースになる傾向があるようです。そのため、日常的な夜更かし朝寝坊によって、4〜5歳までに覚えさせたい「睡眠覚醒リズム」が確立していない子もいるのだそうです。

「子ども・子育て支援新制度」の実施に当たって、「アクティブ・アウト」に留意され、乳幼児期における子育ての大切なパートナーである親(家庭)と保育士(保育園)が「車軸の両輪」になり、お互いに信頼し、お互いの役割を理解し、認め合い、補い合うことによって、子どもを健やかに育む保育が実践されますことを切に願っています。

このところ、なぜか、心の奥底に永く潜伏し、ついぞ表に出ることのなかった「お上の事には間違はございませんまいから」という言葉が、頭の片隅にこびりついて、なかなか消えませんが……。